
～天使の贈り物～

麦茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼天使の贈り物＼

【Nコード】

N5221P

【作者名】

麦茶

【あらすじ】

哀しい過去を持つ、野々宮樹。彼女のクラスに転校生がやって来る。その日、屋上でサボっているとそこには――…天使がいた。それとは別に何かと樹に構って来る神崎 翼。彼の秘密は……？

01: アイツはやってきた(前書き)

はいっ！ノリで描いちゃった☆てへ(殴、蹴
こんにちは。駄作：O r z

01…アイツはやってきた

くプロローグく

「ただいまあ」

あれ？いつもならすぐ帰ってくるはずの“おかえりなさい”と言ってくれる優しい母の声がない。

「おかーさん？」

返事がない…。母は仕事をしていないはずだからいつも家にいて私が帰ってくると絶対に、

「おかえりなさい。手を洗って、服を脱いで頂戴」

と綺麗な声で歌うように私に言うのに…。

——とん、とん、とん

長い廊下を歩いてリビングのドアの前で立ちすくむ足。

なんだかこの扉を開けてはいけないような気がした。本当にただ本能が命じていたんだ…と今は思う。あの時薄っぺらいあのドアを開けさえしなければ…私は今日までこんなに苦しむことはなかったのに。これは罰なの？神様？

＊

01…アイツはやってきた。

「ねえねえ。樹く今日転入生クン来るんだってくイケメンだとい
ね♪」

「なんで男子設定…」

「ん？そこはノリでく」

「あっそ」

私は、ののみやいつき野々宮 樹。

そらみどう空水堂中学に通っている。ごくごく一般の女の子。だと自負してい
る……が！周りの同級生は、

「なんで恋愛に興味ないかなあ？」

としばらく首を捻り、

「変人だからか！！」

と一様に叫び皆様納得して自己解決していくのである。

そもそも恋愛なんかしてカップルになってみる。金にかかるわ、気
はする減るわで一恋二損である。いっこいにそん

だから恋なんてしない。今は“金”がいるんだ。

自分を養う金が……。

——転入生は金持ちだろうか？

私が“噂の転入生”に抱く感情はそんなもんだった。

＊

「緋之宮 月詠ひのみやつくよです。よろしく願います。」

ソイツは皆の期待通り……美形またはイケメン。の部類に入るであろう顔立ちをしていた。自己紹介が済み、緋之宮とかいうやけに整った女の私でさえも羨む顔をした男子は、私の斜め後ろに座ることとなった。

……。

視線が痛い。

なぜだか転人生クンは私の背中をガン見しているようだ。

自意識過剰とかじゃない。

だって私が恐る恐る振り返った時もこっちをガン見してたし！驚き通り越して恐いわっ！

ってコトを隣の篠田しのだに話すと…

「野々宮も!？」

と共感されたので私が何かのターゲットにされたようではないみたいだった。

緋之宮は栗色のさらさらの髪に同じく栗色の瞳…だと思う。

瞳は長い前髪に隠れて見えないのでよく分からない。

でもなんだかぼんやりした空気を纏った子だった。まあ。私には関係ない。

先生の話が終わり（仲良くしろーだとか…）皆が弾かれたように緋之宮の席に群がった。

「ねーねー月詠クンってよんでもいい？」

だとか……。

「どこに住んでるのー」

だとか……。

くだらない。

私以外の女子はきっと緋之宮と仲良くなりたい、あわよくば恋人になりたい。そういう下心がアリアリだ。

「はあ…」

五月蠅い^{いぬれ}。

緋之宮の近くの席の私の周りとはとにかく五月蠅いのだ。

「あり？ののっちは興味ないんだ？」

……。

さあ。来た、私の天敵。

神崎翼^{かみやま ひとる}。

何かと私に構って来る暇人。

しかもタチが悪いことに美形ときてる。

おかげでこっちはいい迷惑よ。先輩からは睨まれるし……。

「……………」

無視。

「ちよっ!？いくらなんでもシカトは酷くない？」

無視。

「ねえねえ!のっちい」

ヒィィ!キモい!

「ののっち言うなあ!」

耐え切れ無くなって(いろいろなことに)つい叫んでしまう。

「あ!やっと思ってくれたあ」

無視されてしょんぼりしてた神崎がぱあっと顔を上げる。

「今のは独り言です。モチのロンこれも…」

「えっ!」

「お前なんか結構ってる暇はねえんだよ。下等生物くん?」

極上の笑顔で黒いオーラを出しまくる。これが唯一の撃退法。

「うゝゝゝ。酷い…」

頭を抱えている神崎に、

「ああ、ごめんなさい。これじゃあ下等生物が可哀相ね?」

と追い打ちをかける。

「と、いうことで離れてくれない？すつごく邪魔…」
「うう…」

ゆっくりと名残惜しそうに私の肩から頭を離す。
そして、

「いい匂いだったあ」

といいながら離れていくのだった。と行かせるはずもなく、

「あっ待って神崎クン☆」

私の中で一番キャワイイ声を出す。すると、神崎は嬉しそうにこつちを振り向き、

「なあに？ののっち？」

こっちに駆け寄って来る。

「あの、ね…キ、スしたいから目つぶって？」
「!?!? うんっ」

そういつて目をつぶって少し背を屈める神崎。

———堕ちたな

わたしはニヤリと笑って、

「ここじゃ恥ずかしいからもっと……こっち」

そう言いながら窓際に引っ張っていく。

神崎は開いている窓の枠に寄り掛かっている。
ふふふふふ。

人生ね。甘くないのよ？

「あ…いくよ？」

「俺…もう死んでもいい…」

と幸せそうに呟く神崎。

「うんっじゃあ死のっか☆」

「え？」

戸惑う神崎の肩を押す。力一杯。

大丈夫。ここ2階だし？

そのまま。神崎は下に落ちていく。

受け身取れるかな？

満足そうにパンパンっと手を叩く私を見て恐ろしげに

「見ろよ転人生…あれがクラス恒例《人生そんなに甘くないのよ神崎くん☆》だ。主にというか野々宮と神崎で構成される漫才だな…
しっかし恐え〜」

ふんっ！転人生にいきなり変なこと教えてんじゃないわよ！

漫才って…死活問題よっ！

こうして成敗しとかないと図に乗るのよ！

「了承した」

はい？

なんか今高校生らしからぬ発言が聞こえたような気がしたけど？
もしかしなくても緋之宮である。

ソプラノの綺麗な声は一度聴いたら忘れるものではない。

「あ。んと。…分かった」

言い直す緋之宮。皆フツーにビビってたからね？

まあ。関係ない。新しい住人のことなんて…。

いち早く気を取り直した私は、教室のドアをガラリと開けいつもの
場所に向かった。

（さあ。転人生はどんなフォローをあの後するんだろう？）
と少し楽しい空想をしながら。

01：アイツはやってきた（後書き）

ぐっだぐだでしかも更新がマジくそ遅い…それでも付き合ってやるぜ！という方はどうぞ生暖かく見守ってくださいまし。

02：天使の飛翔（前書き）

よろしくお願いします。

02…天使の飛翔

02…天使の飛翔

ねえ。君と出会ったのは優しい光の中だったね。

君は汚れを知らない無垢で清らかな子を演じてたけれど…

君は…真っ黒に穢れていて。

可哀相だねえ…生きているモノは皆…可哀相だねえ。

2. そうしてアイツは飛んだ

——とんとん、とん

階段を 上がる 上がる。

てくてく 上がる。

腕に巻いてある腕時計は今9…00を示している。

(もうすぐ1時間目が始まるなあ…)

そんな時間に屋上に続く階段を歩いているのだから完璧に授業開始には間に合わない。

でも良いのだ。この学校は成績さえ良ければ最低の授業出席日数さえクリアしていれば処分はされない。

毎回トップ10に食い込んでいる私が授業を受けなかったところで

どうってことはない。

それにあのまま異質な転入生 緋之宮 月夜の視線を感じながら
席に座ってじっとしているのは嫌だったのだ。

「ふあわーあー眠い」

それに寝むかったのだ。

これが一番の理由だったり、したりしなかったり…。
私が立っているのは‘屋上’に続く扉^{トビラ}。

——：キィ。

軽く悲鳴を上げながら青空を向こうに見せる錆びたドア。

そこに広がっているのは一面の空色。空なのだから当たり前なのだ
けれど…。

どんなに絵の具を混ぜてもできないような色。色、と呼べるのかど
うか…。

「綺麗だなあ」

ただそう言うしかない。

空には白い綿みたいな雲がぽつん、ぽつんと散っている。

風が——：吹いた。

私の髪が揺れる。と同時に眠気が襲ってきた。

きっと暖かに照りつける太陽と柔らかに私を包み込む風のおかげだ
ろう。

「ふあああ」

もう。寝よ。そう思って屋上の真ん中に大の字になる。
ゆっくりと瞼を閉じようとしたとき……。

視界が暗くなった。

「?」

目を薄く細める。

(なんだ?)

——…バサッ

はらり。

なにかが頭上の上から降ってくる。重いものじゃなくて…なにか柔らかく頬をくすぐってふわりと少しの風にも舞ってしまう、太陽の優しい光に反射して硝子のように光っているモノ。

「は、ね?」

羽。真っ白な…それはもうこの世の汚れなんて知らないかの様な…。
そう。まるで天使が持っているような。

「ふふ…綺麗」

本日2度目の‘綺麗’は空には悪いけれど1度目の‘綺麗’とは比べ物にならない美しさだった。

——そして

「あ。ニンゲン」

まるで嫌いな野菜が大好きなシチューに入っていた時のようなノリでそいつはつぶやいた。

「緋之…宮？」

震える声でそいつ…緋之宮 月夜 のことを呼ぶと。

「うん。そうだよ？」

教室にいるときとは比べ物にならないくらい笑顔で…まるで天使のような笑顔でそう返されたのだった。

緋之宮には真っ白な翼が…異なる羽が…生えていた。

私の目の前でとんっ。と降りるとそれに反応するように羽が動いた。

「…じゃあ、お眠り」

優しい彼の声とともに私は……。

02：天使の飛翔（後書き）

では。では。よんでくださりありがとうございます。

加筆修正… 12／30 0… 31

03…白色世界

03…白色世界

ゆらゆら。ゆらゆら。

「…ん」

どれくらいの時間がたったんだろう？
私は今どこにいる？

「あーあー」

声はでるけれど…なんだか、変。
私はどこかのベットの上で寝ていたようだった。
起き上がろうと体に力を込める。

「!？」

力を込めた瞬間、まるで体に電流でも走ったかのような鈍い痛みが走った。

おいおい…本当にここどこだよ？
明日数学小テストあるんだよ…今回は微妙に苦手だからやろうと思
ってたのに目が覚めたら次の日でしたーとかいったらぶっ飛ばすぞ、
ゴラァ？

「とにかくここから出よう！私ポジティブ！さいこー！」
傍から見たらイタイ光景である。

と、その時。

『忘れて。深い深い記憶の底に…』

『偽って。自分自身のメモリー…』

「ああっふあっああ！」

それはまるで……天使。

‘ 天使 ’

滑るように鼓膜に、全身に流れ込んでくる。
唄うように繰り返されるその言葉。

頭がっ煮えくりかえる！ぐちゃぐちゃにかき回されて溶けてしまう！
私のメモリーが死んでゆく…っ。駄目っ忘れては！消してはっいけない！

自分の重すぎて軽い 罪 を忘れてはっっ！
だってもう会えない！思い出せない！

「あああっ！い、やあっ、嫌あああ！」

なりふり構わず絶叫した。

我武者羅に…誰に向かってか分からないけれど…。

何時間？いや何日？

私は動かない体を懸命に動かそうと努力し、叫び、足掻いた。

ああ。後に残るのは…何だろう？

＊ ＊ ＊

「案外…強い」

彼は呟く。

「俺にかかわった全てのニンゲンのメモリーを削除したのに」

高いソプラノ。

「なぜ、こいつのメモリーは消えない？」

戸惑うように。心の底からの疑問だというように…。
そしてふっと瞳を閉じる。

しばしの沈黙。

彼は灰色の瞳で少女を射抜く。
いまだ足掻いている。

「ああ。この娘…」

理解したというように、笑った。

「『人生そんなに甘くないのよ神崎クン☆』の時の…そう、人生は甘くない」

そう言いながらも彼女の呪縛を解く。
思考の呪縛。

「ま。精々、運命、の中で生きるがいいさ」

彼は楽しげに笑ってそう言った。

＊ ＊ ＊

「ああああっ!!………?」

絶えない激痛。

いつまでこんなコトが繰り返されるの?

そう思って次の激痛に堪えようと本能が筋肉を強張らせる。
でも私の身体にはなんの痛みもやって来なかった。

「…?」

終わっ、た?

でもまだ安心出来なくて……。恐る恐る身体を起こしてみる。毎朝、
やっていたコトが偉大だということが分かる。
そして何処までも続く真っ白な世界に『ああ。私には眩しすぎる』
と目を細め、バフツとまた横たわる。

「ほう………」

私は僅かな安堵と共に眠りについた。

03：白色世界（後書き）

今回も読んでくださりありがとうございましたあ。

またのお越しをお待ちしております？

04…君を好きになったわけ(in the distant past)

04…君を好きになったわけ(in the distant past)

『い、樹？大丈夫よ。皆で天国に行きましょう？大丈夫。怖くないわ』

『……っ！』

なんでお母さんは震えているの？
なんで私の首に手をかけているの？

ねえ。なんで……？
壊れていたの…かな？

＊

「おい？ののっち？」
「ん……っ！」

瞳を開けると神崎の顔。
神崎は心配そうに私の顔を見下ろしている。神崎に見下ろされるなんて屈辱だ！
でも今は状況確認から。
今一番気になること。

それは、

「緋之宮は？」

私が聞くと神崎はふて腐れた顔で、

「開口一番なんで他の男のコトお？」
と呟いたけれど私が黙ると、

「あわわっ！！！！あのねっ緋之宮はね帰ったよ！あとねっ！！！！の
のっちがここにいる理由はねっ俺が突き落とされた後……」

あ。忘れてた。

こいつのコト突き落としたんだった。

じつとりと恨みのソースをかけて私に絡み付いてくる視線。

「あ、えっとー」

今度は、私が焦る番。

「俺…本気で嬉しかったのに…」

あ。ヤバい。これ本気だわ。

「ねえ。つつぎし・て？」

悪戯っ子のように口角を上げて笑う。

「あ、あのねっ神、崎？」

「なあに？……樹」

なった。なってしまった。

通称 サドモード。

いつもは（私にだけ）ヘタレな癖に……っ。

まあ、これがあるから女子にモテるんだ。きっと。

私の前でヘタレになると幻滅する女子もいるのに……。

なのに辞めない。なぜ？

ま、まあ。とにかく神崎が私のコトを名前で呼ぶときは《要注意》だ。今がそれ。

今は横たわっているので避けることすら出来ない。

「さわら、ないで」

「え」

「触らないでっ！」

拒絶。

←

隙が出来る。

早く緋之宮を探さなきゃっ！

でも少し演技じみてるかも？？？

「さらばっ」

と言いながら起き上がろうとした。でも

「なんで…泣いてるの」

なぜって。泣いてたから。

色素の薄い灰色の瞳からぼろぼろ透明な雫を零していた。

私が言うと神崎は吃驚したように目を見開いた。
それはまるで自分の行動に戸惑っているみたいだった。

「あ、あり？なんだろうー」

ごしごしと目元を擦りながらアハハ。と力無く笑う神崎 翼は何だか小さくて、子供みたいで、誰かと重なって、緋之宮なんかどうでもよくなって。

「ごめんねっごめんねっ、だから泣かないでっ」

気づくと神崎の意外に硬くて大きい身体を抱きしめていた。
こんなふうにあだ抱きしめてくれれば……。

ああ。あの時謝ってくれ、とは言わないから。

私はここまで自分を憎む事は、なかったのに……。

『違うね。お前は罪を人に押し付けているだけだ』

(……っ！)

突然響く声に心臓が痛くなる。忘れられない、声。澄んだきれいな音。

(緋之宮っ！)

『お前……まあいい、人生は甘くない、だろ？』

(……っ！)

『ははっ！！人間は面白いなあ……じゃあな。野々宮 樹♪』

なんで、過去のコトを知っているの!?

「い、ッつき…?」

翼の言葉にハツとする。

「あ、とにかく…顔冷やしなよ。イケメンが台なしッ!」

笑い混じりに言うと、

「むう…ののちに認めてもらえなきゃ意味ない」

とむくれた顔でいった。

「嘘」

どーせからかってるだけ。

そう思うとなんで悲しくなるのか。私にはさっぱりわからない。

「嘘…かぁ」

「ん?なんか言った?」

先程から吹き出した風の音で、神崎の声が掻き消された。

「な〜んでもな〜い」

軽い口調で断ち切る。

「そろそろ、かえろっか?」

軽く微笑んで手を差し延べてくれる。

神崎は他人の気持ちが分かる子だと私は思う。

だから余計に不思議。

クラスで一人孤立している私に同情した？

私は、か弱系を狙ってないぞ。だとしたらからかってるのか。そーかそーか。分かったから一発殴らせろ。と私が腕をゆらりと挙げようとした時。

「なんで俺が樹のこと好きになったか…聞きたくない？」

と私の鞆を手にもって自分はエナメルバックを肩に掛けながら問う。

「聞きたくない」

即答。

どーせ変態でふしだらな理由だ。聞きたくない、聞きたくない。

「あはっ即答だあ…」

クスクス笑いながら言う。けれど、

「俺が樹を最初に見たのは中学2年の冬休み…」

こいつは私の即答にめめげずに滔々と語りだした。

05 :: 君がいた… (前書き)

● 神崎 翼の過去編はあと1つか2つで終了です ●

05..君がいた..

05..君がいた

俺の隣にはいつも違う女がいた。いろんな女を試した。けれどダメだった。君の泣き顔が忘れられなかった……。

＊

「ねえ翼…しよ？」

気持ち悪い艶のある声で誘う女共。ときどくその眼球を引っ張り出してズタズタにしてやりたくなる。でも君を見つけるまでは我慢しようって思ってたから。

「ん？やーだ」

と適当にあしらっておいた。だってキスしても性行為をしてもだんだん虚しくなるだけだった。でも君に会うまで死ねないから。だから俺の存在意義は君。君について話そうと思う。

君はとても寂しい人で哀しい人で、でも誰にも癒されたくない傷が合った。

——ああ、きっと私のコトを言ってるんだ。と神崎の話に出てくる“君”は私なんだと…

俺が君にこんなにも依存してるのはある意味可笑しいことだった。
だって1年の時同じクラスだったから…。

君たいう(ひかげ)と一俺は反対だから。

虐められてた君とクラスの中心にいた俺とは話も出来ないほど遠かった。

＊

放課後開始のベルがなり皆帰り支度を始める。

『クソ宮ウザくない?』

『わかるーなんかKYだよねー』 『じゃあイジメちゃう??:?』

『さんせーい』

『キャハハハ!!』

クラス中に響き渡る声。

勿論、本人である野々宮は端正に整った眉をぴくりとも動かさずページをめくった。

『ちょ!? 聞こえなかったのー? もしかして耳、遠い??:?』

『ウケルうー』

何の反応もしない野々宮を見ていよいよ本気になってきた女生徒達は、

『あんたそんな涼しい顔してられるのも今のうちだよっ!!』

と言って帰っていった。それでも野々宮 樹はどんな行為もしなかった。助けないクラスメイトを睨む訳でもなく、ただ本を読んでい

た。

次の日。

——ぺた、ぺた

『でさーって!!』

楽しげに会話をしていたクラスメイトは登校してきた野々宮の姿を見て驚愕した。

——：ぴちゃ、ぴちゃ

野々宮は全身から異臭を漂わせて扉に立っていた。

『ちょっと…野々…』

野々宮に事情を聞こうとした一人の女生徒の声は、野々宮とは違う扉から入ってきた者たちの声で遮られた。

『これからーコイツと喋ったやつはーどうなるかぁ分かってるよね？』

クスクス笑いながら言う。

『……』

どうしようもない。

クラスメイト達は申し合わせた様に押し黙った。
これが普通のパーティーならよかったのだろう。
しかしこのパーティーの主催者は学校の理事長の娘。

加倉井 彩。

コイツに逆らったら最後まともな進学は出来ない、どころか酷いときには退学という手段で口を封じられる。

『なあに？皆、遊んでいいのよ？いつもの憂さを晴らすための“パーティー”なんだから。ね？』

殴るも良し。

切るも良し。

上辺だけの笑顔で相手の心を残虐に殺すこのことを彼女は“パーティー”と呼んでいた。

『やらないの？しょうがないなあ…千鶴…』

彼女は呆れたようにため息をつくと側に居た茶髪の少女を見た。千鶴と呼ばれた少女はコクリと一つ頷きながら野々宮の方に近づいていく。

気がつくと野々宮はびしょ濡れになりながらも席に付いていた。千鶴が目の前に立ってもまるで居ないかのように本を読んでいた。

『失礼。』

千鶴は一言呟くと鮮やかな手つきで野々宮が読んでいた本を取り上げて引き裂いた。

——シャツビリビリ

耳障りな音が辺りに響く。

クラスメイト達は呆然とその光景を眺めていた。

『あら？もうすぐH・Lが始まるから皆席に付いたほうがいいんじ

やなあい？』

手で口元を覆いながら笑う。

その日から野々宮 樹に対するクラスメイトの態度は…言うまでもなく悪化した。

＊

「で？」

そういえばそんなことも在ったなあと思いながら私は神崎の話聞いていたけれど、それがなぜ神崎と関係あるのかわからなかったの
で聞いた。

すると…神崎はニタアと笑って

「潰した」

と一言呟いた。

「…え？」

ツブシタ？

「うん。相手のあのー彩だっけ？あの女…潰した…でごめんね。勝
手に…」

心底申し訳なそうに校門を出た道を歩きながら話した。

06 :: 罰と倅（前書き）

お楽しみあれっ！

06..罰と倅

06..罰を与えなきゃ

『翼、翼あっ！』

なんでそんなに名前を呼ぶの？意味が分からない。
気持ち悪い。

とろん、とした瞳で自分を見上げてくる。
つつーっ。と透明な液体が唇と唇を伝う。

『彩。』

軽くキスしながら名前を呼ぶと嬉しそうに笑いながら、言う。

『なあに？翼』

ああ、気持ち悪い。

自分の名前を呼ばれるのすら嫌だ。

『彩さあ野々宮…だっけ？パーティーしてるでしょお』
『…？うん』

言いたい事がわからないと言うように首を傾げる。

『あれさあ超ウザい…』

言葉をオブラートになんか包んでやらない。
俺はぐだぐだした会話がだっ嫌いだ。

『!?!』

驚いたように瞳を見開く。
きっと自分が腐るほど言ってきたこの台詞を言われるとは思わなかったようだ。

『もう既成事実作ったし…ばらされたら困るでしょ? 彩も。シ・タ・コ・ト?』

ニタアッと笑いながら言ってやる。
青ざめる彩。

『な、なんでそこまでしてっ』

理解出来ないでしょう?

樹。って呼んでみたい。

その綺麗な声で自分の名前を呼んで欲しい。
君の瞳に俺だけを入れていて欲しい。

『ん? 君に教える義理はないなあ』

と言いながら、“既成事実”を撮影した携帯を振って見せる。そこには見たらPTAが怒り狂う様な光景が記録されている事だろう。
理事長の娘がこんなコトをしていたとばれたら…。

あはは。

考えただけで面白い。

『と、いうことで…パーティーをやめる、のが条件ね？いい子で守ってたらご褒美…あげないけどね？』

じゃあねーと手を振りながら部屋のドアをあける。

『俺にはこれくらいしか出来ないよ、ごめんね』

と言う声が微かに響いた。

＊

「で…？」

気が付くと空は暗くなりはじめ、寒々とした風が突風が変わっていった。

「だから……」

神崎が言いよどむ。

何。と聞こうとした瞬間。

——ザアア

一段と強い風が吹いた。

「ひゃっ！」

色気一つない悲鳴（？）を上げながら、風のせいで出てきた涙を拭おうとしたら、

「大丈夫!？」

と、過剰に反応された。

「わわっ！なぜに驚く！逆にこっちが聞きたいっ！」

やや驚きながら答えると、

「これが…言いたかったコト」

と言いながら近づいてきた。

「?」

つい首をかしげる。

「その日さあ…」

いきなり脈絡もなく話し出されて私の単細胞はパニック状態です。でもなんとか何を言っているか（彩に【既成事実】をした日のことのように）わかって、

「うん」

短く相槌を打つ。

「樹…泣いてた…いつも無表情バツチり氷のプリンセスなのに…」
「はい？」

「覚えてない？あの日…校庭の隅っこで泣いてたの…」
「のぞいたの？悪趣味…」

恥ずかしまぎれに言ってみる。まさかあれを見られていたとは！
恥ずかしい。穴があったら入りたいとはこのことだ。

「まあ吃驚したわけ」

うわ。華麗に無視したよ。この人。

「でも同時に可愛くもあったんだ。いつものギャップとか…あ、
なんか恥ずかしいね…」

にへへ。と笑って言う。
とたんに顔が赤くなるのがわかる。

「こっちだって…恥ずかしいわ」

「で。俺のこと好きになってくれた？」
「どうかしら？」

正直なのは心。

心は“大好き”といっている。

沈黙。

「つつっ好きよっ大好きいつ！」

沈黙に耐え切れずいう。
でもやっぱり恥かしい。だから神崎…ううん。翼の胸に飛び込んでやる。

「っ！」

びっくりしながらも抱きしめてくれた。
泣きそうだったことは言わない。

06 :: 罰と倅（後書き）

ちよつとくつつけんの早くない？というのはスルーの方針で…

07..僅かな安息(前書き)

あけまして (≡▽≡)

おめでとうございます？

読者サマ全員に幸せな一年が訪れますように。

07..僅かな安息

07..僅かな安息

朝。

あの日から…恋人になりましたあ！

わーわーひゅーひゅー…いつもアツアツ！一緒に登下校してるぜ！
なーんてことはなく。

私たちは下駄箱で偶然会っちゃっただけなんだからっ！

「ねーねーののっち！」

「いいかげんその呼び方やめたら？彼氏なら…まあ彼氏なら…
どね」

「じゃあ…樹様？」

「…まっまあそれでもいいけれどねっべ、別に名前でよばねえと
殺すぞ★なんておもって無いんだからね！」

「ええええ！思ってたの！？てか殺したら本末転倒な気が…ごめ
んなさい…樹」

てんてー人を殺したいって思うと体から滲み出ちゃうんですねw

「思っていないって言うてるのに…まあ呼びたいならいい」

「「ツンツンデレデレ症候群」」

クラスメイトが何か言ってるけれど聞いちゃいけない気がする。
ちらり。と緋之宮の方を見る。

視線が合う。

「お、おはよう」

「…ん」

なんだろう。あの日以来私には無表情をきめこんでいる（クラスメイトにも）。

でも私のポケットには“羽”が入っている。

一見鳥と同じかな。と思えるソレはでもやはりきらきらと輝いている。

「所詮…異形は異形。何の力ももたない…メモリーを消すことさえも…」

その声は周りの雑音のせいで誰にも聞かれることなく消えた。

＊

「…好きだ…」

「私もよ…ダーリン」

ぶちゅ。

目の前には「完」の文字。

黒いスクリーンに白い文字で余計眼に痛い。

私たちはいま映画館にいる。

恋人が来る率98パーセント（勝手統計）。

良く言うくらぶらぶカップル。

悪く言うと言き先が見つからなかった新米カップル。

「はあああゝ面白くなかった」

「どんな映画にもハズレツてあるよね…うん」

私たちの2時間30分を返せーと夕日に向かって叫びたくなる。

日曜日。

私たちはデートをしようということになった。

なっただいいが…翼はやくシタイ…といいだしましたね、はい。
こんのっ色ぼけ猫がっ！

と思いましたね。うん。

てなわけですると遊園地↓映画館ときて…そろそろ辺りも暗くなり始めました。

帰りましょーってことで私たちは私の家に続く道を急いでいるわけです。

「樹。もういつっちゃうの？」

「なっなによ？」

いきなりの展開に少々いえかなり戸惑っていますわたくし野々宮樹。

「帰したくない」

「明日会えるじゃない」

「ヤダ…ヤダヤダヤダ」

駄々っ子のようにヤダ。を繰り返す。

「もうっわかったから…キスクらいな…っ！ちょ…：…は、あ」

「樹って強引なのが好きなの？」

キス、された？

「甘い。樹だから？それとも俺としたから？」

そこっ！真顔でそういう発言をするなっ！

「ななななな、あんたねえ！」

「何？恋人なんだから当たり前でしょ？」

「それはっそうだけど…」

これは、恋なのだろうか？

「樹」

でもやっぱり顔を見つめられると胸がドキドキして…

「つば…んっ」

「ぷはぁ。やっと樹パワーが補給完了♪」

「なんだかどなる気も失せてきた…でもっ私負けず嫌いなものよねっ
と」

ぶちゅー……。

「っ！」

「どうよ？」

「さいこーです。姫様」

ふふん。どうよ？

「じゃ。ばいばい」

「…樹はさびしくないの？」

「？なんていった？よく聞こえない…」

「——なんでもない…ばいばい」

なんだか怒って見えるのは気のせい？

まっ。いっか？

いいのか？

そう思いながらも私は家に入る。

「ただいまー」

誰もいないのに…。

私には両親がいない。なので伯母夫婦に養ってもらっている。

そして今は旅行中。

『ごめんね。樹。私たちこれからロンドンの友達の結婚式に出なきゃいけないの、しばらく帰ってこないけれど…大丈夫？』

『ええ。私のことは気にせずにつくりにきてください』

つい先日の出来事である。

伯母夫婦は海外から来た旅行者を中心にホテルを営んでいる。

大きくはないけれどそれが逆にそれぞれのお客様に丁寧な対応ができていることで評判なのだ。

だから伯母夫婦には海外の友人が多い。

昔から忙しいので、もう慣れた。

「でも時々…痛い」

シン。と静まり返った家はあまり好きではない。

昔、遠い記憶が蘇ってしまうから。

——樹は本当にいい子ねえ。おかーさん安心だわ。

——本当だな。樹は真っ直ぐに、そう。樹きのように育てくれたな。

あそこにいつもお父さんがコーヒーを飲みながら座っていた。

あそこでいつもお母さんが本を読んでいた。

満ち足りた生活だった。

あの日までは。

「さようなら。昔の生活。こんにちは。今の私。」

08..真相と亀裂

08..真相と亀裂

おかしい。

わたくし、野々宮樹はどうしたものと途方に暮れています。

あの神崎翼が私の存在を無視し、まったくついていいほどスキンスップ（自称）をしてこないので。

あ。いや別に触ってほしいとかそんなじゃないけれどね…。

気になるんです。なんかあったのかなって…翼は悩みや弱みを人に見せあいタイプみたいだし。

んー！考えるのは性に合わない！ということで野々宮樹いきますっ！

「翼…なんで無視するの？」

聞いてしまった。

これすらも無視されたら心がさすがに痛いぞ…。

「…」

——…無視？

チクリ。ああ、胸が痛い。針でつつかれたような小さくて深い痛み。目頭が熱くなる。私って結構メンタル弱いんだなあ。

泣きそう。教室で泣きたくない。わずかなプライドで留めようとした涙はいうことを聞いてくれない。

「図書室言ってくる！」

半ば怒鳴るように翼にいう。

——ガララッ

（逃げた、また縋ったその優しさに…）

（縋る？なんのこと？）

（今はまだ知らなくていい記憶）

頭の中で響く声。

あれはいったい何なのだろう？

それから…天使。天使は人間になれるのだろうか？
わからない。わからない。

「調べてみよう♪そうしよう♪」

……。恥ずかしい。私最近独り言多い気がする。

寂しい人になってしまったのか？！

「失礼します。」

朝からこんなところに来る人もいないだろう。

ここならゆっくり泣ける、それに“天使”についても調べられるだろう。

ドアを開けると本の匂いが鼻を擽る。友達はみんなこの匂いが気に入らないと言ったけれど…。

私は好きだった。静かで穏やかでここだけ時間の流れが止まってるみたいだったから。

さてと。私は辺りを見回す。
あった。

私は分厚い“広辞苑”を手取る。埃がふわあつと舞い上がるが気にしない。

ぺらぺらとページをめくり“天使”という言葉を探す。

そこには、

【天子の使。エンゼル。やさしく清らかな人。⇨堕天使】と記してあった。

天子？駄目だ、さっぱりだ。

私がうーんと唸っていると、

「ねえ。なに調べてるの？」

と聞いてくる声があった。私はその声にびっくりして飛び上がった。

「緋之宮…？あ、天使って何？教えて」

私が聞くと相手は拍子抜けした顔になって、

「ありり？驚かないね」

「？」

「だって俺は…いや話そうかな？俺のこと…」

彼がそう簡単に教えてくれるわけがないと思っていた。
なのに…。

「ね。教えてあげる、全部。でも君耐えられる？」

どうということ？

「だーかーらー今から話すことは君の過去に関係があるの！」

はい？

私の…過去？

「じゃあ。事実だけ簡潔に。君は過去…あの時にアクマと契約を交わした。アクマは代償に君を永遠に縛り付け、君の願いを叶えた。歪んだ形で…そんなでもって」

「な、なに？それ…意味が…」

アクマ。アクマってあの？

悪魔？サタンとかのアレですか？ああ。私の日常は可笑しくなってる。

ただでさえ翼にシカトされて心が痛むのに、昔との決別は済んでたはずなのになあ。

そんな考えに反論するように自分の目じりから涙が出てくるのがわかる。

「ほら。だからいったじゃん」

目の前で私が泣いても全く動揺せずに言い放つ。

「っヒクッ、で、もなん、で緋之、宮は…その」

「ここに来て君のメモリーを削除しようとしたか？」

私の言葉を覆うように彼はいう。

「そう、なの。君はなんでっ———！」

「クスッ」

キスされた。

昨日、翼にされた唇にキスされた。
気持ち悪い、不快、不快。

「ちょっと何するっ！——！！」

今度はもっと不快なキス。

長いし、深い。所謂ディープキス。

手で彼を押し返そうとしたけれど、見ために似合わず彼の力は強かった。

「ね、ね。」

キスをしながら器用に彼は聞いてくる。

「君の彼氏これ見たらどう思うかなあ？」

「へ……？」

「君って頭悪いの？」

目を細めて馬鹿にしたように鼻で笑ってくる。（キスをしながら…）

「な、のっあふっ、こっつ、んんっ、よっ！」

彼氏？

翼のこと？

まあ。緋之宮が知っていても可笑しくはない。

なんせ翼は教室で、『今日から樹は俺のだから手エださないでね？』と高らかに宣言したのだから。何が“俺の”だ。馬鹿者、と殴ってやりたかった。が、緋之宮がこっちをあの転入当初の視線でガン見していて怖かったのでやめた。

「ドアにご注目下さいませ」

やけにおどけた口調で緋之宮が言う。
その時にはもうキスは終わっていて、私は酸欠でクラクラする頭を
頑張ってドアに向けた。

「――っ！っ、」

そこには、翼がいた。

呆然とした顔の翼。

あ、違う。

頭が重くて、痛くて、説明できない。

「っ、翼あ、ちがっ」

ハッ、とした顔になり、だんだんとその顔には笑みが広がる。悪魔
みたいだ。

「お前、彩みたいに最高にキモい」

「ああああっ！」

「お幸せに〜♪淫乱さん」

何も言えない。

違和感。何？これ舌が痺れる。

――ピシャリ

「行っちゃったね〜最愛の彼」

クスクス笑いながら彼は言う。さも愉快だ。と私を嘲る。

「ひっててひよんなひよひよひやひよ？」

「ごめ〜ん♪何言ってるか分からない♪」

ぎりっ、と歯と歯を合わせる。だってそうしないと緋之宮に飛び掛かってしまいそうで。

でも次にアイツから出て来た言葉に私は絶句した。

「あ！あとねえ。アイツは悪魔だよ？君のね♪」

09 :: 優しい忘却 (前書き)

某..アニソンとサブタイが被ってることは沈黙して下さい…。

09：優しい忘却

『お母あさ、ん？』

『大丈夫よ。皆で天国に行きましょう？』

嗚呼。行きましょう？

逝きましょう？

どっちでもいいけれど止めて。私は生きたい。
必死にもがく。命懸け。首に手をかけられて…。

私の家族は“無理心中”をしようとした。
まあ、私以外公認してたけど。

『ねえねえ君さあ。契約する気ない？』

ふと隣で聞こえてきた声。
くるりと後ろを振り向く余裕もなく。誰が話し掛けているのかも分からずに。

『…契約する…』

『なにをいつているの？樹』

どこか切羽詰まった母の声。
きっと一人でうわ言を呟き始めたとも思っただろう。

『んじゃあ、君は何を願う？何をボクにくれる？』

声は聞いてくる。

なんだか頭の中に直接入り込んでくる。
ぐわん、ぐわん。反響して…。

『私はっ生きたい!』

首を絞められながら、息も絶え絶えに言う。

『で、何をボクにくれる?』

『あげるっ私をあげるっ…駄目?』

駄目かなあ?

私なんてあげてもなあ…。

『契約完了っ』

クス、顔も見えない彼が——嗤った気がした。

＊

「ニンゲンは何でも忘れる…」

忌々しそうに彼はいう。

「うん。忘れてた…」

「何でもないことのように言うな…」

静かに告げられた声がなんだかとても、鋭く響いた。

「ごめんなさい…」

誤った私を一瞥すると、

「それより、追わなくていいの？」

くいつとドアのほうを顎でしゃくる。
む。としながらも、

「私は翼のものなんでしょう？ だったら今この瞬間も私は全部、翼のもの…聲も血も瞳も骨も…全部」

「——そうかあ、その心で“殺戮の墮天使”を墮としたの…」

私はその時耳当たりの髪の毛をいじくっていたので何を言われたのかはサッパリわからなかった。

でも“殺戮の墮天使”という単語だけは聞こえた。

「——…殺戮の墮天使」

「気になる？」

面白そうに笑いかける緋之宮。なんだかその態度が面白くなくて、しかも図書室も全然居心地がいいところではなかった事が分かったので無視し、調べていた本と崩れた制服を直して立ち上がる。

「む？ どこに？」

「翼が一番綺麗に見える場所」

むふふ、我ながらいいいネーミングだ。

「屋上か…」

造作もなく答えを暴く。

ええええっ！何故分かった？！

「誰でもわかる…」

むう。

「じゃ、あ、あとね君が喋れなくなったのは葉のせいであ…いきなり喋れるようになったのは、君に残ってた墮天使の魔力のせい。……愛されてるね」

そう言った緋之宮の声は余りにも哀しかった。

「う、ん。そう、そうよ！私は愛されてるのっ」

いいでしょ？。と笑うと、

「うん。いいな」

——…と素直な答えが帰ってきた。満面の笑みで、無垢な素敵なそんな天使みたいな笑み。

「バーカ、何見とれてんだよ」

それは事実で。

「緋之宮月夜。私、アンタだけは嫌いになれない…かも？」

我ながらおかしいことを言っていると思った。

「——っ!!」

吃驚してる…。

新鮮だわ。

「じゃあ、ねっと…わわ!」

ドアに向かっていた緋之宮の脇を通り過ぎようとしたら、腕を捕まれバランスを崩して…抱きしめられてた。

恐怖が蘇る。

そんな私の心境を察したのか、察しなかったのか緋之宮は、とても掠れた声で、「もうちょっとだけ…このままです」と言った。それは魔法のように私の心を落ち着かせた。

「浮気になる…でも君弱ってるから…特別っ」

むぎゅーっ と抱きしめ返してあげた。

心の中でも外でも“特別”と言い訳しながら。

ふわっという匂い。

若草の匂い。

好き、好き。

でもこれ以上は翼だけに許された時間。

だから私はそっ、と離れた。

私を抱きしめていた手は虚しく空をかいて落ちた。
諦めたように、

「月夜…俺の…名前」

と囁いて一歩、退く。

「ん。月夜：バイバイ」

少し軋むドアに手を掛け、一気に払う。

——キィ：ガララッ

た、っと助走をつけて今度こそ……！

そのまま、キキーツと急ブレーキ。そして勢いを殺さずに階段を駆け上がる。

愛しい人を思いだしながら。

——十月夜Side十一——

嗚呼。行っちゃった。

君はとってもいい香りがした。ふわりとした黒髪に、少し低い声。

嗚呼。行かないで。“殺戮の墮天使”が持っている君の全てを奪って、優しく檻に閉じ込めたい。

嗚呼。君みたいなニンゲンが僕の側にいてくれたら：優しいその声で永遠に僕の名前を呼び続けてくれたら。

どんなに素敵だろう。

どんなに素敵だろう。

“殺戮の墮天使”から奪ったらそうなるかなあ？

愉しみ、愉しみ。

09：優しい忘却（後書き）

いろいろなコメントありがとうございます。

大変励みになります！

辛口なご意見もありますが、それすらも嬉しいです（＊＾|＾＊）
注）Mではないっす。決して…！

10：歳は関係ありません！（前書き）

10話です。

10：歳は関係ありません！

たったったっ。

リズムよく階段を駆け上がる。あともう少して屋上。翼が、そこに居るっていう確信みたいのがあった。

錆びたドアノブに飛びつく。

力任せに捻って引っ張る。

「翼の~~~~ウ~~~~アカ！」

居るかどうかもわからない。

でも叫んだ。

秋なのに暖かい風が吹く。

「翼っっ！」

裏側に駆け込み、一際高くなっている所の梯子を登る。

「みーつけた」

思わず笑みがこぼれる。

背中が見える。

顔がゆっくりとこっちを向く。

「翼」

「さっきから煩いよ…」

「しょうがない。だって翼が降りて来ないから」

それきり答えない。

「私さ、愛されてるんだ」

「……あの天使に？」

少し恐る恐る聞いてくる様子はとてもじゃないけど悪魔なんて者には見えなかった。

「ううん。悪魔に、とっても優しい悪魔に……もっと言うと“翼”
つていう悪魔に……」

「悪魔、悪魔って……」

「うん、私こんがらかってきた」

「でもキスしてた」

「私は全て貴方のもの。聲も血も瞳も骨も、全部……でしょ？」
「っ！」

「何を恐れてるの？私が聞いてあげましょうか？」

「——淫魔みたいだよ？」

ボソツと呟かれる。

ひどい。

「でも、好きなんだ」

間髪入れずに翼は言う。

「好きで、好きで、樹があんたの天使のものになっちゃったら……って」
「私は貴方のものにしかない……もっと言うとなんか私は貴方のものに
しかなれない（……）」

なんか可愛いぞ。

優しく抱きしめていいですか？いいよね？

だって私、彼女だし……。

そろ、そろと近づくと、睨まれた。その視線は酷く頼りなかった。

「だあいすき！」

そう言いながら抱き着く。吃驚してる。

でも、と続ける。

「きちんと説明して」

腕に翼の温かいぬくもりを感じながら、言う。

「わかった…」

翼は語る。

私のこと、自分のこと。

「ボクは悪魔。通称“殺戮の堕天使”とかよばれてる」

「殺戮…」

日常とはかけ離れた話に思わず呟く。

「そ、契約者に無理難題を押し付けるだれにも懐かない悪魔…殺したこともしばしば」

「へ、へえ…すごいよね」

「怖い？」

胸の内を当てられる。

だってしょうがないよ、私も“契約者”なんだから。

いつ殺されるかも分かんないんでしょう？

「…でもボクは恋をした」

私の返事を待たずに語りだす。

「私に？」

「…全部言わせてよ」

半ばあきれながらも言う翼。

よかった。いつもよりちょっと鬼畜だけれど翼だ。

「嘘、ついてない？」

「…ない」

「絶対？」

「…すくなくとも樹に嘘はついてない」

「じゃあ誰に嘘ついてるの？」

「うーん、樹が知らなくていいとこのお偉いさん？」

「……なにそれ？まあ、いっか…」

「疲れた」

「同感」

どちらともなく呟き、ばたりと堅いコンクリートに横になる。

「痛く、ない？」

唐突に聞かれて困る。

うつらうつらしてたもんだから何て言われたのかすら…。

「ん？…いいよ？」

適当に返事しておく。
翼の顔が微妙に歪む。そのあと悪戯を思いついた子供のような顔になり、
では。と言って顔を近づけてきやがりました。
しかし、唐突（私はいきなりに弱い、脳がついてこない）に近づかれたので、避けることもできず。

「クフ、充電完了？」

長きにわたるあーだこーだ。
何回したんだ、この色魔。

「んっ…はあ…やけに疲れた。よって膝枕することを命じます」
「……！」

びしっ！と言わなくてはならない時が女にはある！…はず。
暫く戸惑って（と言っても2秒ほど）

「どうぞ、お姫様」

と言って恭しく手を差し伸べてきた。
さすが悪魔、きつとこういうことに慣れてるんだろうなあ…。
てか幾つなんだ？

「んー319くらいじゃない？まだまだ若いなあ」

こ、こいつエスパーかつ?!
しかしその前に…、

「!?!?! 300! 私は300のおじいさんとキスしてたの? 詐欺だ!」

「いや悪魔で言うともだまだ若造だし? それに樹と同じくらいだよ! 頭の中は!?!」

「ううううう!?!...寝る!」

私はめんどくさいことがあると寝ます。
でも今私は幸せだから…。許そうかな?

11：闇の名をもつもの（前書き）

更新数がだんだん遅くなっております麦茶です。○○
私は学生なのですが！——後輩入ってきてほしくない！切実に願う！
皆入試で落ちろ〜！どーせ「おい○○！菓子パン買ってこいよ！」
とか言われるに決まっております！……ごめんなさい、でした。で
は本編をどうぞ）　　〆〆　　（

11：闇の名をもつもの

11…闇の名をもつもの

闇。何処を向いても――闇。

「アイエオス、“殺戮”を連れて帰ってまいれ。悪魔が夢などを見てはいけない…」

「御意」

闇の中で響く声。

その闇で唯一光り輝くそれは…魂。
数ある命の中の光りある魂。

「…“殺戮”の心を掴んだ“漆黒”はメモリーを消し生かせ。あの“漆黒”は死ぬ運命にはなかった…“殺戮”…優秀な悪魔でありながら何故…？」

「発言の許可を？」

「良い」

「恐れながら“殺戮”は堕天使…ですから…」

「うむ。それもわからんでもないが、まあ良い！……散れ！我が子らよ！アイエオスについて行くが良い」

闇の中で声は響く。

その声は天空の天使にも届く。

すーすー。

規則正しい呼吸音が聞こえる。

ここは早朝の教室。本来ならば立ち入り禁止の筈の“第2校舎”（3階建ての“第1校舎”の約2分の1の大きさである）。

その校舎の1階の教室の隅で黒髪を惜しむことなく光に晒し、眠っている少女、通称“漆黒”。

「…む！まだいけるによか！？……負けなげよ………すぴー」

ときどき聞こえる寝言は御愛嬌。

まるで光の加護を受けているかのような“漆黒”は名前に似つかず光り輝いているように見えた。

そつと“漆黒”に忍び寄り、額をやさしくなでる。ほんのりと温かいその感触はずっと触っていたいほど心地のいいものだった。

「……お母あさん？」

突然発せられた声にびくりと体が反応する。

舌ったらずな口調から見てまだ眠りの中にいるのだと知る。

幸せそうに呟くその姿は、庇護欲を慫られる。

「いや、やだあ…お母あさん……！」

先程まで心地よさげに瞳を閉じていたのに、今は苦しげに顔をゆがめている。

思わず抱きしめて安心させたくなかったが…今自分がすることはただ無力に額をなでることだけ…。

彼はただ“漆黒”の額を撫でつづけた。

「闇の名を持つ哀れな少女…今宵…貴方を苦悩の中から救って進ぜよう」

彼の声はただ宙をさまよって、誰にも届くことはなく消えた。

＊

私は、夕暮れの中で目を覚ました。

「ん…：…ああもう夕方かあ…」

秋の夕暮れは冷える。

寒さに身を震わせながらも、教室から出る。

「それにしても寒いなあ…今度からホツカイ口持ってこよ…」

次のさぼりの為に用意するものを頭の中で考える。

私は自分の欲望の為ならなんでもできる子です！と自負しております。

もう倉庫的存在になってている“第2校舎”はなんだか図書室の空気に似ていて居心地がよかった。

私は、考え事があるとよく図書室に籠こもっていた。

でもあそこは危険だ。月夜にばれてしまっているから。駄目だな。

私の考え事とは…

1 今後のこと。

2 天使と悪魔…所謂「翼」と「月夜」の事

3 悪魔の目的について。

大まかにこんなところ。

これは翼に聞けば分かることだからそこまで悩む必要はないのだけ
れど。

変な薬を飲まれたり（舌がしびれるアレ）、翼の正体だったり、
殺すだの、殺戮だのと、私の日常とはかけ離れた出来事が起こりま
くって自分で思っているよりも精神的にも肉体的にも（キスとかキ
スとか）

疲れていたらしく、近頃眠くて眠くてたまらない。

ダメーじそんなに大きかったのかい？ 自分よ。

そんなことを思いながら校門を出る。

さすがにこの時間帯は遅くまで部活をやっている人かなんかでなけ
れば残っていないだろう。

「はあ」

思わずため息が漏れる。

「どーしたの？ 樹」

「うひゃっあ！」

いきなりしな垂れかかってくるな！

「んん？ やっぱまだ体調悪い？」

しゃべるなよ。

首筋に吐息かかってくすぐったいです！

毎日私の送り迎えしてくれるのはありがたいけど…行き成り出てく

るのはやめろ！

……でも、好都合だ。

「翼、あく…」

まって何が目的なの。と続けようとした時、

「悪魔については答えられませーん」

何故分かったし…。

悪魔は意地悪でした。

天使は教えてくれたのに…。

「そんなこと言われても誓約に縛られてるんです」

そうなのか。

悪魔も大変なのね。

きっと、人間社会みたいに使えない悪魔はリストラされるんだ。しかもリストラされても再就職の機会がない恐ろしい社会なのかも。と、私が考え込んでいると

「くん、くん。何だか嫌な匂いがしますな…」

「ちよっ?! 何してんの?!」

首筋の匂いを嗅がれていました。公共の場で。

「ぐえっ」

絞めた音。

「みきゃ〜」

投げた音。

はい。分かりましたか？皆さん。人を投げるときは背負い投げを行いますしょう〜。

今回は少し危険ですが襟を掴み自分の背中を軸に投げて見ました。見てください！相手はダウンしていま……、

「樹〜誰に説明してんの？」

…せんでした。

そういえばコイツ2階から落としても、絶食させても、血祭りにしても死ななかったしな…。

「そういえば…」

「なによ」

「樹、今日何処でさぼってた？」

「第2校舎の1階の一番隅の部屋だけど？」

「ふうん…」

なんだ？私のさぼりポイントを掌握して、いざという時になんかしてやろうという魂胆か？

でも、なんだか翼の表情が険しい。

なんだろう。

そういえば…今日余りに昼寝に適した小春日和だったのですこし寝たのだが…。

いつものように悪夢を見ていたのだけれど、今日はなんだか悪夢の前に幸せだった日の夢を見た。

「樹…着いたけど」

「はへ？あつ、ああ…いつもありがと。」

気がつくと家の前だった。
いつになく険しい顔で、

「今日は満月だから…気をつけて」
「？満月だけ何よ？」

「…魅せられないようにねって…」
「はあ？んなわけないでしょ」

魅せられるって…。詩人かおまえはっ！

「まあいいや…でも気をつけてね？」

そういつて闇に溶けていった。

「なによ…あれ」

呆然としながら見送った。

12..月が満ちる時(上)

12..月が満ちる時(上)

夕食にはカップラーメン。

3分きちんと待ってから蓋を取る。もくもくと湯気が立ち上る。

「しっかしあれは何だったんだろ…?」

今日の翼は何だか変だった。

いつもへらへらしてるイメージしかないのになあ…。

『気をつけて』

って何にだよ!

もっと具体的に説明しろ…。

ずるずると麺を啜る。

不健康?

私は料理が出来ないんだよ!

悪かったなっ!家庭的じゃなくてっ!↑(結構気にしてる。

ずずずっ。と醤油味のツユまで飲む。

こくり、美味いわぁ。

カップヌードル作った人おいで。なでなでしてあげるから。

いつもよりハイな気分で自室へと足を進める。叔母夫婦の家は、結構大きくて私の部屋も割と大きい方だと思う。

9畳という広さ。

私が昔住んでいた自分の部屋は6畳くらいだった。

その広さの中にクローゼットとシングルベッドと勉強机しかないという殺風景さ。

しかも私は洋服やなんやらは余り持っていないのでクローゼットは9割、書籍で埋まっている。家具を増やそうとしても養ってもらっている義理があるので無闇にねだれないし。

それにいまのままで十分生活できるのだからそれでいいのだ。壁はクリーム色でカーペットは若草色。カーテンも同色。

ふとデジタル時計を見ると【8・56】の文字。

「勉強する気も起きないしなあ…」

お風呂に入って、本読んで寝よう。

ということ、お風呂にはいる。

一人はさびしいと思う。ひと肌が恋しくて泣いた日もある。けれど、もう私は中学生なのだ。甘えは許されない。

ガラッとモザイクがかかった扉を開けて湯気が立ち上るお風呂にかかる。

ふう、一日の疲れがとれる。バスボムをいれてあるのでミルク色のお湯だ。

一人のときだけ使うこのバスボムはミルクの匂いをゆるゆると立ち昇らせてくれる。

お湯にもぐって空気を吐き出す。ぷくぷくと音を立てて空気の泡みたいのができる。

一通り温まってから湯船から出る。

「うう沁みる」

といいながらシャンプー&リンスをする。

お湯につかるのは好きだけれど、こいつだけは好きになれない。

だいたい沁みるだけだろ……。あまり綺麗になった感がないし。
と胸中で悪態をつきながら――終わった。私とあいつらの戦いが。

「一万年と二千年前から愛してるう〜♪」

訳の分からん音程で歌を口ずさみながら体を拭き、ドライヤーで髪を乾かす。

私の髪は肩までくらいあるのだけれど、乾きが遅くて遅くて……。こうして私は約1時間程度の入浴を終了した。

1階にあるお風呂から出て2階にある自室へと向かう。

――パチリ。

部屋の電気をつけると優しい光が部屋の隅々まで照らした。
なんだか、本を読む気にもならないなあ。

ということだ：ベランダにでもでるか。

ガラリと扉を開けて外に出る。

サァーっと冷たい風がお風呂上がりの私の体温を奪っていく。

余りの寒さにいったん部屋に戻ってカーディガンを羽織る。

――満月だった。

2階から見たご近所さんの家は月の光に照らされて輝いているように見える。

『魅せられないようにね』

といった翼の言葉が脳裏に浮かぶ。

まさか、いくら綺麗な満月でも魅せられるって……。

そう思いながら優しい光に照らされてよく見えるアスファルトに目をやる。

――？！

何かがやってくる！

眼を凝らすと人影がやってきた。ざっとみたところ10人くらいだろうか？

一見普通の人影だけど、なにか：怖い：怖い、怖い。

私の家のほうへやってくる……？！

言いようのない寒気、悪寒が押し寄せる。

さーっと頭から血が引いて動物的本能が芽生える。

急いでベランダから部屋に戻る。カーテンを閉めてベッドに入る。

背中に嫌な汗が伝う。自分の呼吸音ですらうるさく感じる静寂。

いまでは布団に侵入してくる満月の光は自分の居場所を示されているようで恐ろしいものでしかなかった。

全身の器官を総動員させて人影の気配を探す。

分からない。分からないものほど恐ろしいものはない。

――リーン

鈴の音？

――リーン

透明な音だ。でも今はそれですら恐ろしい。

「電報でーす。野々宮さーん？電報でーす」

その時。面白がるような声で、ふざけた声で月夜の声が聞こえた。

13..月が満ちる時(下) (前書き)

なんだか、予想外にぐだぐだですorz…

13..月が満ちる時(下)

13..月が満ちる時(下)

「電報でーす。野々宮さーん？電報でーす」

…月夜…？

時計を見る【9..57】。

あと3分で10時だ。この時計はピッタリの時間になると音が鳴るんだよね。止めないでいるとずーっとピピピピピピ鳴りつづけるんだよね。

結構、煩いんだよね。そして私はそれを止めなければならぬという使命感に燃えて絶対に押してしまうんだよね。ポチッと。

……しかし、今押して止めたら私がここに居ることがばれてしまう。

冷や汗が伝う。

——ピピピピピピピ！

けたたましい音が9畳間に響き渡る。

嗚呼、鳴っちゃった。

——もうどうでもいいや。

私は半ば自暴自棄になっていたのかもしれない。

頭のキャパシティを越える出来事が起こりまくって…でも誰にも相談出来ない…つらさ。

ポチッとボタンを押す。

今まで鳴り響いていた電子音が嘘の様に止まる。

「樹―居るなら返事くらいしなよ―」

もう、煩いんだよね。

何が面白くてそんな声出してるの？

――カチャ

ドアノブが回る音がする。

ちらりとドアの方を見る。

さっきまで感じていた恐怖は消えていた。

「こんばんは。月夜」

と、我ながら見当違いな返事をしているな、と思う。

「…こんばんは。樹…怖くないの？」

その質問にゆるりと首を振る。代わりに、

「お仲間は？」

と質問してみる。

先程の人影で月夜一人というのはさすがにおかしい。

「いるよ―下に。ていうか仲間、違う」

と言いながら勉強机に座る。

椅子があるんだから椅子に座ればいいのに……。

「ご用件は？」

「メモリーを奪う…いやメモリーを書き換える…」

「書き…換える？」

そ。と言いながら足を組む。

栗色の髪の毛が光に反射して金に見える。瞳は…灰色？

翼と同じだ。

「頭のいい君なら分かるんじゃない？」

と言われて考える。

私のメモリーを書き換えて月夜にメリットが？

「何が目的なの…」

「“殺戮”を連れ戻すこと」

翼を…？

「最近アイツ仕事してないんだ…君に…」

「私に？」

「本来“殺戮”は君の体から気を奪っていかなきゃいけない。それが代償だからね…」

「……」

忘れてた。

そうだ。私は生きる代わりに悪魔に自分を委ね、その後生きる障害となっていた両親を殺した。

「なのに、君は弱らずにこうして生きてる…可笑いと思って調べ

たら“殺戮” ったら君のこと凄く大事にしてるんだから：困っちゃ
うよね：だから代わりに僕が君の気を少うし奪った。大変だった
よ：“殺戮”の目を盗んで二人つきりになるのは：今日もこうして
悪魔が弱る満月に事を進めた：」

そんな滔々と言われても…。

ということは葉って言ったのは、嘘？

でも：じゃあ、私に縋ったのはなんで？

意味がわからない！

「で、君のメモリーを書き換えることで生じる僕のメリットは？」

もし：もし、私が記憶を失ったら翼はどうなるだろうか？

きっと契約者がいなくなつて構う相手がいなかったら寂しいんじゃないだろうか？

というか：自意識過剰かもしれないけれど：彼女がいなくなつたら
悲しい：くはないよね？

でも傷ついても狂つても、もとの“殺戮”に―：もどる。

「もしかし、て…」

声が震えないように気をつける。

目の前で嗤つてる天使に気づかれないように…。

そつ、と時計を手に取り時間を戻す。

10時1分前に…。

「もしかして私の翼に関してだけの記憶を消すの？」

「御名答」

ぱちぱちと掌を合わせて私に拍手する。
その瞬間私は月夜の方にダッシュする。
そして、喧しく鳴りはじめた時計を片手に突っ込む。

このままっ逃げれば——っ！

耳を押さえている月詠を横目で捉える。

確信しながらドアノブに手を掛ける。冷たい金属の感触。

「ダメだよ？ 飼い猫が外に出ようとしたら」

耳を塞いで顔を顰めていた筈の月詠がにっこり笑いながら私の手をとった。

「な……なんでっ！」

「私がニンゲンの動きを予想できないとでも？」

首をかしげて愛らしく言う。でも私には全然可愛らしく見えなかった。

「私を……どうする気？」

「だから樹のメモリーを書き換えるんだって！」

焦れたように月詠はいう。

そして、強く私をひっぱってベッドに落とす。

嗚呼。ドアノブの感触がまだ残ってる。もう少しだったのに…。

「樹は天使のことも、悪魔のことも、みんなみんな忘れるの！」

歌うように言う。

嫌だ。これはもう思い出して眺めることができない！！

「あ。なんなら昔の記憶……幸せなものにしてあげようか？」

私の両親は、無理心中をしようとして私が殺した。父はその時もう死んでいて…母だけ殺した。

返り血がびちゃ、と私にかかって。幸せな家庭だったのに。周りの親族も“何故あんなことをしたのか分からない”と言っていた。

「必要ないわ」

声がふるえなかった自分はもう乗り越えたのかな？

このことを。

「でもお。知らないの？君の親御さんたちは本当はドライブに行って“事故死”だったんだよ？」

——え？

目の前の天使は続ける。

「あれ？知らなかった？やだなー隠し事があるなんてねえ」

にたにた笑いながら聞いてくる。

茶化しの声はもう聞こえなくて…。

「殺戮が変えたんだよ…君の人生を」

「それ、本当？」

嗚呼、やっぱり乗り越えていなかった。
だって震えていると思うのよ、私の声。

「本当だよぉメモリを司る悪魔は怒ったけど殺戮には敵わないしねえ？」

——私は平凡に生きれたの？

「だから、ねえ？どうせ皆忘れちゃうんだから…この際元に戻していいでしょ？」

分かんない。私は親殺しの罪を忘れて、事故死した両親を毎日、毎日悲しむだけでよかったの？
そっちのほうがまだ楽だ……。

——でも。

私は時々自分の手が血で染まっている夢を見るし、親の最期の顔も時々ホントウとして呼び起されるだろう。だって真実だから。起こってしまったことだから……。

「やだ、やだっあ！」

確かめなければ…っ！

「ちよっ！信じてよ！」

——信じるものか！

ねえ嘘だったの？翼！

14：本当の君は——だった（前書き）

グロ描写を少し含んでおります。
苦手な方は回れ右！

14：本当の君は——だった

とにかく私は翼の所に行って確かめなきゃいけないの！」

「確かめるって…何を？」

「私になんでそんな事したかを、よ！」

勢い込んで怒鳴る。

月詠の虚を突かれて様な顔。

「な、なに？」

「そんなことも分からなかったの？」

む、とする。

今まさに私はこいつによって記憶を書き換えられて大切な人の記憶も失ってしまうっていうのに…。

起こっている場合じゃない。今はただ——逃げることだけかんがえろ！馬鹿。

「彼——“殺戮”はね…魅せられてしまったんだ」

「は？」

「君という蝶に、ね？」

かぁっと、場違いな表情をしてしまう。

「嘘、う、そよ…だったら私の幸せを願う筈じゃない」

そうだよ。ありえないよ。

いくら彼氏だからって住む世界も、種族も違うのに。

ダメだよ。――…翼。

「だから、そこでメモリーを書き換えれば全部OKだと思う」

書き換える、書き換える、煩いなあ。

「ばっかみたい――」

幾分か冷静になった頭で現状分析。

私は両親と衝突事故で死ぬはずだった。しかしそこに翼が割り込み、私の運命を変えた。

「馬鹿みたいーって言った…？」

「ええ、私みたいな無力な人間相手に馬鹿らしいな…っ！」

苦しい、苦しい、苦しい！

喉と背骨に来る衝撃。

痛い、痛い、痛い、痛い。

「君ってカスだよね…ホントに。なんで“殺戮”が愛してるのか理解不能…だよ？」

にっこり、天使の笑み。

魅了するでも、ごまかす笑みでもなく…ただ気味の悪い、笑み。

「わ、たしを殺、して…いいの？」

全身の骨が軋んだ。

「ん？半殺しならいいんじゃない？」

事もなげに言う。

何にキレたのか知らないけど、苦しい、痛い。

嗚呼、死ぬのかな私――。

段々と意識が朦朧としてきて……。

でもいくら待っても永遠の眠りは訪れなかった。

「馬鹿、殺す訳無いじゃん――罪なき者を殺すのは患者のみ……だよ」

くくつ、と笑いながら私の喉から手を離す。

そのとき――、

「キヒヒッ――なア…樹イ、コイツヲ殺シタラ樹ハ哀シイ？」

地獄から響いてきたと錯覚する程低い音、いや声はよく知った愛する人のもので……。

けれど、私の部屋の一壁を壊して入ってきた悪魔は……翼は…、

「ナアニ、少オシヒネッテ、ツブシテ、ナカのグチャグチャしたモノを引ッ張り出シテ破壊スレバ終ワルヨ…キヒヒッ…愉シミダナア」

この人は誰？

翼と同じ、声、容姿、瞳をしたこの人はだあれ？

「ナア、樹イ？」

全身から殺気を感じる。

怖いよ、怖い。

言いようのない悪寒が全身を駆け巡り、色素が薄かった灰色の瞳は今は血の様な朱……その視線がこちらに向いた時…死ぬかと思っ
た。

カタカタと歯が鳴る。いや全身の骨が鳴っているようだ。

「怖いノ？俺ガ怖い？樹ヲ大事ニシテキタ俺ノ事ガ？」

ねっとり絡み付くような視線を全身に注がれる。

私よりも震えているのは月詠。カタカタなんてもんじゃない。
今にも崩れ落ちそうな様子だ。瞳は零れそうくらい見開かれ、
もともと白い肌は白を通り越して蒼い。

「ナに？ナンデ他ノオトコヲミツメテルの？好きナノ？ジャア殺ソ
ウカ？君の視界にイレテいいのは俺ダケだ……嗚呼、樹の瞳モツブ
シテシマエバいいの？ネエ」

月詠が死ぬ！

畏れに満ちた顔でこちらを向く。その顔は先程まで私を殺そうと
していた天使だとは思わなかった。思えなかった。

「い、つき…助け……」

彼の声は永久に聞けないだろう。

だって——死んじやった。

死んじやったらもう会えない。

「樹ニ喋リカケルなんて図々シイネえ？ネエ？」

月詠の身体を引き裂きながら翼は聞く。

「あ、ああ――…あぁっ…!!」

引き裂くたびに赤黒い血が飛び散る。月詠の身体はびくびく痙攣していて…ソレを恍惚とした表情でぶちぶちと引き裂き続ける。血が吹き出る。ぴゅーっと…天井が真っ赤になる。

「アハハ、ハ！死んだ、殺した、死んだ、殺した、死んだ、殺したあっ！」

気が可笑しくなったかのようにわたしは自分の身体を掻きむしり続けようとした。

でも、それに気付いた翼はいち早く私の傍に来て腕を抑えた。私の腕はカッターでやったみたいなのじゃなくてもっとグチャグチャしてた。

「樹！樹イ！？ドーシタノ！？」

嗚呼、こういうとき翼ならすぐ分かってくれたのに……。

「殺戮さん？翼を返して？ね？」

私がそうするときよんとした顔になって、

「俺ガ翼ダヨ？」

「翼はそんな喋り方しない」

「デモワカンナイんだ…」

「翼…帰ってきて…私を助けに来てっ！」

悲痛な声で叫ぶ私を“殺戮”は怖ず怖ずと抱きしめた。心配だからしてくれてるんだと分かっているのに“いつも”ではない抱きしめ方に違和感と苛立ちしか芽生えない。

でも、必死に血と内蔵がこびりついた腕で私を抱きしめてくれる。嗚呼、これが“殺戮”であり“翼”なんだと。

どちらも私を愛してくれている、歪んでるけど。

どちらも私を抱きしめてくれる、怖ず怖ずとだけど。

どちらも私のココロを縛り付ける、力任せに。

「い、樹…？大丈夫、大丈夫だから…俺に何をして欲しい？」

力強くて、優しい声。

私が一番安心できる。

「今の俺は悪魔の時ほどのチカラは無いけど…弱いけど…樹位なら護れるから、ね？」

抱きしめたまま言う。

きゆうつ、と抱きしめ返す。

翼からは厭な死臭しかなかった。でも、心地好かった。

「ヒック…ア…グス」

涙か止まらない私の背中をとんとん、と落ち着かせるように優しく叩いてくれる。

「だから……アイエオス……この契約は破棄する」

「っ……！……御意」

ややあって、苦々しさを交える声で答えたのはアイエオスと呼ばれた青年くらいの人(?)。

頭が働かない…。

「しかし……様。貴方は…貴方の救いは……っ、……申し訳ございません。出過ぎたことを申しました」

翼の名前は聞き取れなかった。言葉が濁………っていたとしか形容できない。

清んでいた泉の水に汚れた石を落とした時のような…。
そんなことはどうでもよかったけど、

「翼？どこかに行っちゃうの？」

私が話しかけても、翼は振り向いてくれない。
なんで？どうして？

「樹、君はすべてを忘れなきゃいけない……」

——え？

「だ、だって……ずっと一緒にいようって……」

「そんな約束した覚えがない。ソナタとの契約は今我の名において破棄された。さあ、我が呪縛からそがれて何処へなりとも行くが良
い！」

その声は何百年も生きてきたものとしての威厳と自信があつて、私みたいなちっぽけな人間が縛っていい心じゃなかったんだと……。

「最後に悪魔は儀式を、謝罪の儀式を……」

「ああ、そうか……屈辱だな、こちらから手を引かねばならぬとは。私の悪魔人生で最大の汚点だ」

「――・――様っ！」

嗚呼、そっか。

私との契約は人生最悪か……。

そりゃそうだ。大して美味しくもない魂を持った小娘相手に何十年も時を費やして、そのうえ食すこともままならないなんて……。

そんな事を考えていると、翼がやってきて私に傳いた、

「我が主よ、契約を破棄することを謝罪しよう、この身をもって……」

「うん……ごめんね？何年も苦しめて、縛って……」

何をするんだろう？

ぼんやりと思っていると、首筋に熱い痛みが走った。

「！」

「私の付けた刻印は一生消えることなく、主の傷を癒すだろう」

「よく分からないけどありがと？」

本当に何が起きているのか分からなかった。ただ彼が私を噛んだというのは分かる。

「主はっ……謝る事も、感謝することもない！我が我がっ！」

だからなのだろうか？

目の前に傳く血染めになった黒い男を見て、もう薄れ行く記憶の中で、そっと彼の手をとり、

「貴方が誰だか知らないけれど、悲しみは恋愛の次に人生を彩る最高のスパイス、だよ？誰かがそう言ったの……遠い昔に」

と言って、笑ったのは。

彼はしばらく呆然としていたけれど、だんだん笑みが顔じゅうに広がって、

「それを教えたのは我だ。我が主よ……」

といわれた瞬間、私は意識を失った。

——さようなら、

14：本当の君は——だった（後書き）

どうなるんでしょう？

この人たち……。

作者の理想を無視して暴走しています。
特に翼。

【番外編】

I t i s I t h a t w a n t t o c r y.

（前書き）

翼が見た彼女の意外な脆さ？

【番外編】 It is I that want to cry.

そつと、校内を見やる。

そこには、たくさん笑顔と幸せで溢れている様に私は見えた。だって、皆笑っていたから……とても幸せそうに。

でも、私はハズレを引いてしまったようだ。

「おはよ、クソ宮く早く死ね〜♪」

第一声がそれって。

心の中で思う。無視してスリッパをはく。上履きがなくなるのなんて日常茶飯事。

ま、どうでもいい。

中学1年生の始まりはサイアクだった。

今日のは流石に……きつかった。

びしょ濡れのまま帰ってくるわけにもいかず、体操服で帰る。とぼとぼとアスファルトを踏みしめる。

「はあああ〜っ」

帰りたくない。かと言って学校に戻る気はさらさらない。

そこで、ふと思いついたのが公園。と言ってもほぼ学校の敷地と言っている。

「見つかるかな？」

ま、隅っこなら見つからないよね。そう思ってくるりと踵を返す。
あそこなら、泣けるかもしれない。

——私だって、泣きたい。

虐められて悲しくないはずがない。怖くないはずがない。
だって、だって……。なんで私ばかりこんな目に会うの？私が何か悪い事をしたの？

幼心に思うのは、悲しいという気持ちだけ。
勇気を振り絞って学校に行けば、『早く死ね』と、お前なんか生きていく価値もないと愚弄される。

「私だって……私だってっ！」

傷付かないはずがないのだ。

毎日、毎日……自分の罪を再確認させられている気分だ。
学校では表情を決して変えない、あいつらなんか泣かされてたまるかつ、と思うけれど……。

やっぱり、普通の女の子のようにきらきらした世界を味わってみたい。そう思っただけが悪い！

「……っ……ひ、っく」

嗚咽。

いつの間にか着いていた。

何がいけなかった。

私の態度が悪かったか？それとも醜い嫉妬心か……。

明日が、土曜日で本当によかった。

泣き腫らした顔を誰にも絶対に見せたくなかったから。

「カサッ」

——!?

後ろで何かが動いた気がした。

ばっ、と後ろを振り向くけれど誰もいない。

ほうっ、と息をつく。

私は、立ち上がって宣言する。

「こんなことで泣くなんてバツカみたいだ——!!」

大きい声で言う。

ああ、すっきり♪

私は、まだ弱みを見せなくなかった。

誰にも……。

【番外編】 Do you teach to me? (前書き)

私に教えて？

両親を殺した貴方——…。

【番外編】 Do you teach to me?

どーしよう。おかあさんが、息してないよ。

大丈夫。ただちょっと長い眠りについてるんだ。

そうなの？

そうだよ。だから安心してお休み？

うんっ！わかった！

＊ ＊ ＊

優しい光が差し込む。

ふわりと髪をなでる優しい感触。

幸せなはずなんだよ？なのにどうして胸が苦しいの？

痛いの？破裂しちゃいそうなの？鼻がツーンとして鳴咽が止まらないの？

何も怖くないし、痛くもないし……。

嗚呼、悲しいのかなあ？

「んっんん……あ、さ？」

目を開けると、お父さんよりも若い男の人が私の目の前にいた。とっても綺麗な人だと思った。灰色の瞳に、茶色い髪の毛。少し冷たい感じのする目だけけれど。

でも、嫌いじゃない。

それにこの人の手はとってもあったかい。

「おはよ…う？」

「おはよう」

笑うと、冷たい顔じゃなくなるな。

嬉しいな。嬉しいな。

ただ、その人が笑っただけなのに、とっても嬉しいな。

「おと、さんは？ おかあさんは？」

私が眠たい目で聞くと、

「んゝ、天国？」

てんごく。

それは、何？

「心が綺麗な人が死んだら行くところだよ？」

へえゝ。おとーさん達はそこに行ったのか。

じゃあ、ここは天国？

「樹はここで、お父さんたちは天国、かな」

へ？

ぽかん、と口をあける。

なんで？

私も天国に行きたいよ？ おとーさんとおかーさんと天国に行っち

やだめだったの？

「だーめ、」

優しいこの人が少し怖く見えた。

私の怯えを感じ取ったのか、彼は優しく笑った。

「ボクは、君の大事な人……」

そうなんだ。

でも涙が止まらないよ？

「泣かないで、お姫様」

「だって、だって……私ひとり置いてかれちゃった……」

私が、ダメな子だったから？

置いて行かれたの？

「樹は、いい子だから……まだ天国に行っちゃいけないんだ……」

そう言いながら、愚図る私を抱きかかえると、

「悲しみは恋愛の次に人生を彩る最高のスパイス、考えて御覧？」

最高の……すばいす？

「悲しみがなかったら人は幸せがわからない……」

うん？

「だから、ねえ、樹が悲しいおかげで幸せを感じられる人もいるってこと……忘れないで」

……？

首をかしげて彼の言葉を瞳を閉じて噛みしめ、頭の中で租借するように考えていると、ふっと温もりがなくなった。

吃驚して目を開けると今まで抱きかかえられていた私はカーペットに横たわっていた。

血塗れのカーペットに。

『忘れないで』

『忘れません……』

私の両親を殺した貴方——…

【番外編】Do you teach to me? (後書き)

一気に2本！

なぜなら友達の誕生日だから。

関係ねー（ーー）

15..失くした記憶は再生することなく。

15..失くした記憶は再生することなく。

寒い。

ココはどこ？

ゆっくりと覚醒していく。

「……寒い」

ぐるりと見回すと私の部屋じゃ、ない？

真っ白い。無機質な。

叔母さんたちは？……ああ、そうだ。旅行に行ってあと何日かで……帰ってくるんだ。

「樹ちゃん！樹ちゃん！起きてっ、姉さんに続いて貴方までもっ、嫌よ……っ」

まだ子供がいなくて若々しい、遥子叔母さん。

いつも冷静沈着なその人が私の目の前に座っていた。

「遥子……さん？」

なんで、いるのだろう？

「い、つきちゃん？」

職業柄いつも完璧にメイクをしている遙子叔母さんが、今は目の下に隈ができて、目も泣いたのかな？ととっても赤い。

「ど、したの？」

声がカラカラで掠れた音にしかなくていない。

私が、叔母さんのほうを見て瞬きを数回すると、叔母さんは信じられない、と言うように目を見開いた。

「樹ちゃん！？　すみません！ドクターを呼んで！」

慌てた様子で、入口の方に声をかける。

本当に、何なんだろう。

「樹ちゃん！覚えてる？貴方……事故にあったのよ？」

——え。

事故？

きーん、と頭に響く声。

『——・——様、さあ』

なに、これ？

『……は……あ……ない……』

段々聞きとれなくなっている。
懐かしい声だな。でも誰の声？

わからない、わからない、わからない。

私はそうしてまた意識を手放した。

十
十
十

「樹ちゃん、お見舞いにきたよ！って覚えてるよね？」

数日後、クラス代表の渡辺 百子^{ももこ}とかいう人が私の病室^{びつ}を訪れた。
大きな花束と千羽鶴を持って……。

「あッ……ありがとう！」

中1の時と違い私はそれなりに幸せな日々を送っていた、らしい。

「でも」

と、渡辺さんに続けて言う。

「ごめんなさい……何も、覚えていなくて」

そう、私は記憶がない。

小さいころの記憶は……ある。忌わしくて、悲しい事故の記憶は
ここにある。

でも、それ以外は何も覚えていない。



その事が分かったのは数日前。

佐島ドクターが、真剣な顔でやってきて、

「樹ちゃん、日本の都道府県の数は何？」

と、なんとも当たり前の事を聞いたので、

「え？……47、ですよ？」

当たり前の事なので間違っていたら、相当恥ずかしい。
私が恐る恐る答えると、

「じゃあ、今から言っていく人に心当たりがあったら言ってね……」

そう前置きするとずらずらと知らない人の名前を上げていく。

「有保 英子、飯島 久、今村 俊介、榎本 千秋、……神崎 翼、
木村 多枝」

そこまで言って、どう？心当たりはない？と優しい口調で聞かれた。だから、

「ないです」

と答えたら、悲しそうな顔をして

「君のクラスメイトの名前だよ……」

と言って、くると叔母さんの方を向くと、

「誠に申し上げにくいのですが……樹さんは、記憶喪失です……」

ああ、私の記憶がおぼろげで事故当時の記憶がないのはそのせい
か……。

叔母さんは口に手を当てて、そんなっ！、と絶句してるけど。
別に悲しくもなんともない。だって、最初から分からないものを
そう分かれというの？

「樹さんは、物理的ショックよりも精神的ショックから自らの記憶
を封じ込めたのだと思います」

何かの記憶？

わかんないけど、遥子叔母さんや秀伯父さんの事はきちんと覚えて
いる。

「わ、分かりました……樹ちゃん……？ 大丈夫？」

事故にあったと聞いた時から叔母さんは昔以上に過保護になった
のだが……。

大丈夫、と頷くと不審そうな顔をしながらも佐島さんと一緒に出
て行った。



「そっかあ」

渡辺さんは残念そうに言う。明るくふるまってるけどやっぱり悲しそうだ。

ごめんなさい、私が謝ると慌てて

「樹ちゃんは何にも悪くないじゃん！」

と言われて逆に説教されてしまった。

「あ、ごめんね？……ってことは翼の事も分からない？」

翼。手に持っているクラスの名簿票を見る。

——神崎 翼。

あった。

「うん……分からない。でも何で？」

私が聞くと、彼女は絶句してとても……気の毒そうな、悲しそうな顔になった。

なんで？

「翼は樹の彼氏、だよ」

——！！

私に彼氏なんていたんだ！

感激。私も捨てたもんじゃないわね！

そんな風に現実逃避しても、

「やっぱり、知らない人と愛を育むのはちょっと……」

だよー。と渡辺さんも言う。

その日は、授業の進具合や、クラスの事を話して渡辺さんは帰って行った。

嗚呼。胸の中で声がするの――…。

でも、誰なのかすら分らない――…。

なんて、なんて、もどかしいんでしょう？

16.. ゆっくりと。

16.. ゆっくりと。

私は、今週の内には退院できるのだそうだ。

事故で負った外傷も、発見が早かったこともあり、そして周りに医療に携わる人がいて応急処置をしてくれたのが功をなしたらしい。

「よかったね、樹ちゃん」

あれから、毎日 渡辺さんは尋ねてきてくれる。

母子家庭でバイトがいっぱいあるのに……、あるがとう、百子サマ。

「やっほー」

「おお、モモ、退院できそうだから、退院したらすぐ学校行くね？」

「マジで！？ やったね！ 皆も喜ぶよ！」

皆にも逢ってみたいけれど、本心は叔母さんを安心させるために早く学校に行きたいだけだ。

「うん、皆にも会いたいしね…あと、神崎君にも…」

ちよっぴり恥ずかしいけれど彼氏さんには会ってみたい。

「もう、彼氏なんだから呼び捨てでよくない？」

「ま、まあ…一応、初対面だし？」

「そ、そっか…ごめん、アタシ……」

「い、いいよ！？気にしてない」

そっか、私は皆の事初対面だけど、皆は違うんだよね？
でも、そんなに気を遣わなくてもいいのに……。

「あ、ごめん！急に仕事任されたから行くね？ごめんね！来たばかりなのに……」

「うん、分かったーじゃ、ばいばい」

「うんっ。ばいばーい」

モモは、元気よく手を振りながら帰って行った。
最近の楽しみは、モモとのガールズトークもあるけれど、もうひとつ。

「友達、もう帰ったの？」

「うんー、バイトだって」

モモが帰った途端に、隣のベッドから声がする。

私と同じ年の、一之瀬 れんしょう 連翔。

色素の薄いサラサラの茶色い髪の毛と、同じ色の瞳をもっている。
目が片方事故で見えなくなってしまったらしい。私が起きた日の
3日前に目が見えなくなった。

「よかったね……退院」

どこかさびしげに言う、連翔。

「……連翔は退院したら何処行くの？」

退院すれば、私たちは離ればなれだ。

自分勝手な思いだけれど、それは……寂しい。

私たちはお互い仲間意識のようなものを感じていた……少なくとも、私は。

だから、かな？

まだ、離れたくない。答えを聞くのが怖い。

「……秘密」

だから——その答えに吃驚すると共に安堵したのかもしれない。

「えゝズルイ！」

だからこんな軽口が叩けたのかもしれない・

「いいもんゝ、連翔がいなくなたって、私には“翼”って言う彼氏がいるからゝ」

本当は連翔の方に惹かれていたのに……。

いつもみたいに柔らかく笑って、憎まれ口をたたくのだと思って待っていた。

でも、彼はその言葉を聞いて瞬間フリーズした。

そして、呆然とした声で

「そ、うなんだ……」

と呟いたきり黙りこんでしまった。

どうしよう？怒らせること言った？彼氏の話は禁句だった？悶々と考えていると、動く気配があって隣から彼が出てきた。

どうしよう？ なにかいわなきゃ！

「あ……れ、」

「ちよつと頭、冷やしてくる……」

そう言つて出て行つてしまった。

私はそれを、“ああ、そういうば。神崎君の話はしたことなかった”と思ひながら見送つていたのだった。

16::ゆっくりと。(後書き)

肝心の翼との交流がない！

翼は、いつか出します。(＊、艸、)

17..君がいい(前書き)

無事京都研修から帰ってきましたあ！

生八橋うめええ(旦那様)

美味でした。しかし麦茶は餡子が嫌いです！じゃあなんで食った
といわれた方、おっしゃるとおりでございます……。

17..君がいい

16..君がいい。

その日、連翔はいつまで経っても帰ってこなかった。
余りにも遅いもんだから、私はダルイ体を起こし、談話室へと足を運んだ。

——すると。

連翔は、談話室の緑色のソファで丸くなって寝ていた。

「かわいい……」

つい、呟いてしまう。

連翔は一見、女の子と間違えられるほど綺麗なのだ。

本人は、“可愛いね”と言うと不貞腐れるけど本当に可愛くて、綺麗なのだ。

指先で目にかかった前髪を払う。

すると出てくるのは包帯で覆われた右目と閉じられている左目。

痛々しいはずなのに、なぜか芸術作品のようで……って！私何してんの！？

変態さんみたいじゃない！

独り悶々としていると、

「んっ、」

と、連翔の瞼が僅かに動き、唇から吐息が漏れ始めた。

——うわ、エロ。

女の私でさえそう思う。

どんだけな色気を醸し出しているのだろうか？

「な、ん……で……」

ん？何をいつているんだろう？

よく分からない。

「お……れ、じゃ……」

うー。じれったい！

起こそう。本来の目的はそこにある。

ゆさゆさと身体をゆする。

「起きてー、もう夜ー昼寝、長いー」

ぐだぐだと、言い連ねながらゆすりまくる。

初め連翔は、眉を顰めて不快そうな顔をしていたが、だんだん覚醒してきたようだ。

「……誰……」

細く目を開けながら、連翔は言った。

「誰って……わたし、樹こころです」

どうやら寝ぼけているようだ。

「ちょっと、起きなさいよ」

いくら、気が長いと言っても、いい加減苛々してくるというものだ。

ぺちぺちと頬を叩く。

すると、手で払う仕草をした。

子供かお前は。

「寝ぼけてるでしょ？ 連翔ー」

私が呆れ半分、顔を覗き込むと……。

「うるさい……」

と言つて……え？

唇に柔らかい感触。

——え、え？何？

「れん、しょ……」

「まだ……足りない？」

そういつて嫌に整った顔を近づけてくる。

嫌、待て。

何が起こっている？

もしかして、連翔の素はこれ？

天然たらし？

……。

埒があかない……。

だから、私は顔に満面の笑みを張り付けて、

「起きようか？」

と優しく起こしてあげた。

＊ ＊ ＊

次の日。

「おはよう」

「お、おはよう」

私は、昨日の事を引きずるつもりはないけれど……。
あっちは、満々、みたいね。

「あゝ、昨日の事だけど、……事故ってことでいいんじゃない？」

少し気まずいけれど、そういうしかない！

私の言葉を聞いて、連翔は吃驚した顔になっていたけれど、その
あと……、

「――彼氏いるって本当か？」

重々しく、問うた。

――来た。

絶対に聞かれると思っていた。

私にも良く分からない、彼氏“神崎 翼”のコト。
逢ったこともない。

触れたことすら、私の記憶にはない。

ただ、懐かしい、と言う感情だけ――…。

「そうだけど……私は逢ったことすらない……」

私がそう答えると、怪訝な顔をする。
当たり前か……。

「記憶を失う前の話だもの……覚えてるはずないでしょう」
「……！」

連翔は目を見開く。

「だからね……私は別に、連翔でも……」

私が言いかけたその瞬間、

「駄目だろ……！ “翼” が哀れだ！」

普段穏和で怒鳴ったりしない彼が私に向かって——怒鳴った。
私は呆然としながらも、その言葉を受け止めた。

18：別れの時は静粛に。（前書き）

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

とバイオレンスに謝ってみた。

――反省中――

18：別れの時は静粛に。

17. 別れの時は静粛に。

クリーム色の四人部屋。

清潔な、でも不安になるような消毒の匂い。
朝のニュースを写している黒い縁のテレビ。

「……哀れだ」

普段、といっても余り長く居た訳ではないけれど、友達として……異性としての記憶は君が初めて。

そんな君が普段出さない大きな声を出した。

喉、大丈夫かな？

「……そ、かあつ。」

哀れだ。と言われても、私には『神崎翼』君は趣味も性格も誕生日も知らない、親戚以下の存在なの。

彼氏、と一口に言っただって、仲が悪かったかもしれない。
別れる一歩手前だったかも知れない。

神崎翼より一之瀬連翔の方が、連翔が——好き。なのに。
逢って見なければ分からないかも知れないけれど……。

「翼…だっけ？ そいつは樹の事をずっと待ってるんでしょ」

知らないよ。

だって一度もお見舞いに来てくれなかったんだよ。

メールさえ来なかったんだよ。

「――分かった。バイバイ、一之瀬君」

明日、退院しても大丈夫かな？

今の私は、前の私じゃないんだよ。神崎くん。

それでも私を愛せるならば……やってご覧よ。

私は君を好きになるかもしれないけれど……きっと君は私を嫌いになる。

「樹っ……」

「何？」

自分でも驚くくらい冷たい声が出た。

ゆっくりと後ろを振り向く。

そこには

ゆっくりと後ろを振り向く。そこには傷ついた顔でこちらを向いている連翔。

「大丈夫、また会えるよ」

にこり、と微笑んで。

また……逢おうね？

＊ ＊ ＊

「――・――様。本当に…宜しいのですか？」

果ての無い、漆黒。

「仕事を寄越せ……アイエオス」

そこに……膝を抱えて座る髪の長い男。
どこか窶れ気味の…。

「しかし……っ」

そこには、同じく黒尽くめの青年。
何事か言い募る。

「黙れ……我の犠牲者はどこだ」

その声には優しさなど欠片もなく……ただ深い慟哭と、悲しみだけ
があった。

威厳に満ち溢れたその姿、その声。

その空気。

彼はもう……求めない。

19..神崎 翼

19..神崎 翼

退院してから約一ヶ月が過ぎた。

先生やクラスメートは何かと気を使ってくれるけれど、知らない人や思い出せないことがあるたびに責められているようで、胸が苦しかった。

あまりにも心配する皆には『もう大丈夫、昔の自分じゃなくて違和感があるのは謝るけど、私は私。野々宮 樹だから!』と言った、言ってみた。

これで反感を買っても、いいや。

そう思ったのに口々に謝られて面食らった記憶がある。

そうだ、これから記憶をくつつけて行けばいいや……そう樂觀した。

ただ一つを除いて。

「翼あ! 放課後、補習だよ!」

——神崎 翼くん。

私の彼氏。随分遊び慣れているご様子。ちゃらいケメン。不真面目。(付き合っているかどうかは不明)

正直言ってこんなに格好いいとは思っていなかった。しかも一月も同じ教室で生活しているのにコンタクトを取る気は皆無。私もなんだからチャラ系は怖いから近づけない。私達はぎこちない友達未満だった。

でも神崎くんは時々こちらをじつ、と見詰めては目を細めて、険しい顔をすることがあった。

そんな時、いつも輪の中心で笑っている神崎くんとは別人のようになったかのように怖かった。

これは――チャンスかもしれない。

樹は唇を噛み締めた。

樹は入院期間、全くといっていい程、勉強に手をつけていない。だから樹も補習に参加するわけだ。

「会える」

というわけだ。

しかも補習は何度か参加したけど、人数は限りなく零に近かったはず！

ひとり意気揚々と樹は教室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5221p/>

～天使の贈り物～

2011年10月10日02時25分発行